文芸部第三回リレー小説　二番手：如月碧

その声に一瞬で現実に戻されて、咄嗟になんでこんな最悪な時にきたのか、と冬野は思った。いや苗坂がいるときに来られても面識のない二人は戸惑ってしまっただろうが。苗坂が学類の友人なら、午屋はサークルの仲間だった。普段そんなに交友関係が広いと思っていない冬野にとっては、自分が弱った時に心配して次々に見舞いに来てくれることは有難いことだった。有難いことだけれど、さすがにこの状況はまずい。とりあえず鍵はかけてあるから、いきなり午屋が入ってきて驚くということはない。けれどこのまま返事をしなければ、律儀な彼は冬野に何かあったと思って大ごとになるだろう。大家に掛け合って鍵をあけてもらうくらいのことはするに違いない。その真面目さが彼の愛すべき長所ではあるが、この場合どうしたものか。逆にここで返事をしてしまえば、冬野が部屋にいて午屋が来たことに気付いていると知られてしまう。そうすれば何故冬野が部屋に入れてくれないのか不審がるだろう。見舞いに来て、さすがに扉越しの会話だけで追い返されるとは露にも思わないだろうから。もういっそすべてを打ち明けてしまうという選択肢もある。どういうわけか冷凍庫に入れておいた林檎が増殖していたらしく、冷凍庫を開けてみたら飛び出した大量の凍った林檎に埋もれて動けないのだと。いやだめだ。誰がそんなことを信じるのだ。それこそ病気で頭をやられたと思われて、大家さんコースだろう。

「稔さん、まだ具合悪いの？大丈夫？」

　午屋が心底心配そうに追い打ちをかける。午屋自身に悪気はなく本当に心配して言っているのだろうが、冬野にとっては単なる追い打ちでしかない。ただでさえ凍った林檎に押しつぶされているせいで、頭がよくまわらないのに、こんな重大な決断をすぐに下さなければならないなんて、無理な話だ。そうやって冬野が悩んでいる間にも時間は経つし、凍った林檎はどんどん排出されて続けているのか重みも増し続ける。どうしよう。どうすればいいのか。

「う、午屋か」

　耐えかねて声を出してしまったことに、自分でものすごく驚いた。自分の体が自分の意識で動かせなくなっているみたいに感じられる。それでも今のは自分の声だ。ものすごく震えているのが明らかではあるが。

「稔さんいたんだね。あまりにも返事がないから、もうとっくに元気になって外出してしまったのかと思ったよ。でもさすがに流行性感冒だから、そんなに早くは回復しないか。今は学校でも結構流行っていて大変な騒ぎだよ。サークルの中でも君だけじゃなくて、秋山さんとか村上君とか、あの頑丈そうな木村君もかかってね……まさか木村君もかかるとはみんな思っていなかったから、彼が流行性感冒になったって聞いたときはみんな震えあがったよ。ものすごく強い菌なんだろうなってね。サークル活動もしばらくは控えようかって検討するくらいの勢いなんだ。稔さんの部屋には確かテレビがないって言っていたから知らないかもしれないけれど、今年の菌は実際に強力なやつなんだってね。なんでも数年前に流行ったやつがパワーアップしたとかなんとか……」

　午屋は冬野がまったく相槌を打っていないにも関わらずぺらぺらと話し続ける。冬野は正直午屋がこんなに話すやつだと思っていなかったから驚きつつも、扉を開けなくても、こちらが何も言わなくても話し続けてくれる午屋にとても有難く思った。こうやって気がすむまで扉の前で話したら、もしかしたらそのまま帰ってくれるかもしれない。とにかくはこの状況を午屋に知られないで済む。そこでふと冬野は考える。本当にこの状況を知られないことがいいことなのか。確かにここで午屋に実情を伝えてもすぐに信じてくれることはないだろうし、ただの熱のおかげで頭も沸いちゃったやつにしかならないだろう。しかしこのままにしておいて、この凍った林檎の山をどうするのか。自分自身ではもう手を握るのでさえ満足にできないくらいだから、林檎を扉の外に出すなり、本当はいけないが窓からはき捨てるなりはしたくてもできない。普通の林檎ならまだしも、この凍った林檎はこうしている今でも容赦なく冬野の体温を奪っていく。このままいけば凍死が先か、圧死が先か。どちらにせよデッドエンドしか待っていないことは明白だ。幸い午屋はファンタジーを解さない現実主義者だが、真面目な性格だから本当に困っていれば助けてくれるに違いない。

「……それでサークル活動再開のめどなんだけどさ、って稔さん聞いている？」

　ようやく午屋は冬野からの反応がないことに気がついたらしい。これはいい機会かもしれない、と冬野は思った。

「午屋、あのさ」

冬野は目の前にある、霜がとけて水滴をまとった赤い林檎をぼんやりと見ながら言った。林檎の下には、林檎から滑り落ちた水滴が集まって水たまりをなしている。フローリングだとはいえ早く拭かないと床が駄目になってしまうな、なんて関係ないことを思った。

「お願いがあるんだ」

「何だい？それよりもできれば中に入れてくれないかな？君がどうしても具合が悪いならこのままでも良いんだけれど、正直寒くてね。ほら、例年のつくばではあり得ないほどの雪が降ったせいで自転車が使えなくて歩いてきたんだ。君のお願いは中でゆっくり聞きたい」

「そのことなんだけど」

冬野は覚悟を決めた。今こそ午屋に言うんだ。凍った林檎に潰されて死ぬなんて間抜けな死に方をするわけにはいかないのだ。

「郵便受けに予備の鍵が入っているから、それで扉をあけてくれないかな？今ちょっと鍵を開けられなくてさ」

「そんなに悪いのかい？節々が痛むとか？それならちょうど良かった。林檎を持ってきたから、すり林檎にして食べるといいよ」

　林檎はもうたくさんだ。それより早くその扉を開けてくれ。

「ちょっと待っててくれよ」

悠長に郵便受けを探っている午屋に、冬野はいらいらしてくる。早く、早く！

　しばらくして、やけに重々しく鍵が開けられる音がした。そして、じゃあ入るからねと言いながら、午屋は扉の取っ手に手をかけた。